

## 鑑賞 「風神雷神図をみる」

小学校中・高学年 全3時間

授業のポイント： 実物大に再現した「風神雷神図屏風」を畳の部屋に置いて、ろうそくの明かりでみる鑑賞法を大切にす。鑑賞作品をみての交流の活性化のために「やりとりルール」をとり入れる。

指導計画 第一次 何をしているのかな（2時間）

第二次 当時の人の心にふれてみよう（1時間）

### 風神雷神図屏風

国宝「風神雷神図屏風」は、江戸時代初期に活躍した絵師「俵屋宗達（1602 - 1630）」の筆と伝えられています。俵屋は京都で有名な扇屋であったとされ、その屋号をもつ宗達は、扇面に絵を描く絵師であったようです。そのため「風神雷神図屏風」に、屏風でありながら扇面の構成が伺えることは大変興味深いのです。

宗達はよく古典からその素材を求め、この「風神雷神図屏風」の風神や雷神は、鎌倉時代の「北野天神縁起絵巻」に描かれている風神・雷神がモデルであるとされています。ただし、「北野天神縁起絵巻」の雷神の姿は、宗達の風神に取り入れられ、宗達の雷神は、天衣の揺れ方をヒントにしているとされます。また、雷神は赤く彩色されているのに、宗達の雷神は白鬼です。金地の空間を跳び回る雷神の肌は、赤より白が似合い神々しさも強まっているとされます。

写真1．実物大に再現した  
屏風での授業



## 授業設計の視点

実物大に再現する

実物大に再現して作品を鑑賞する

鑑賞するときは、実物大に近いものを見ることで作品のもつ雰囲気を再現したいと思います。

実物の「風神雷神図屏風」は、各縦 169.8cm 横 154.5cm の二双仕立ての屏風です。「百聞は一見にしかず」ということわざがあるように、美術図鑑の精巧な写真であっても実物のもつ迫力や空間構成、作品のもつ雰囲気にはかないません。そこで、コンピュータの拡大ソフトを活用して、ほぼ原寸大に分割拡大したカラーコピーを発泡スチロール板に貼り付けて実物大に再現することにしました。

ところで、実物大に再現するからこそできる鑑賞方法の利点をさらに挙げることができます。それは、「風神雷神図屏風」を制作当時と同じように鑑賞することが再現できることなのです。

畳の上に屏風「風神雷神図屏風」を置いてみるができます。

ろうそくの明かりで屏風「風神雷神図屏風」をみるができます。

特に、ろうそくの明かり鑑賞する意味は、蛍光灯の明かりとろうそくの明かりの違いだけでなく、光が照らす角度が違うことです。江戸時代当時は、「風神雷神図屏風」は、畳の部屋に置かれていたわけですから、当然、ろうそくの明かり（或いは、油を燃やして照らす明かり）で下方から照らされていたと考えるべきです。筆をとった宗達自身もきっとその明かりで絵筆をとっていたに違いありません。したがって絶えず宗達は、横・或いは斜め下からの光を意識し制作したと推測できます。

また、当時の人々は、畳の上に正座して、「いい屏風ですなあ。」と少し見上げながら感嘆の声をもらしていたことでしょう。しかも、ろうそく等のちらちら揺れる明かりでみれば、なお一層の風神・雷神の奇異な迫力を味わえたことでしょう。

楽しくじっくりみる

楽しくじっくりみることを促す

「風神」「雷神」の部分を切り取り、部分的に提示を行うことによって、子ども達の自由な感じ方を引き出しじっくりみる行為を促します。

じっくりみる行為を促すために、風神雷神を部分的に提示していくことが有効であると考えます。そこで、風神・雷神をいくつかのパーツに分けて提示していく授業を構想します。

写真2. 風神のパーツ



写真3 . 雷神のパーツ



やりとりルール

集団鑑賞でのやりとりを活性化させる～「やりとりルール」の導入～

今回の「やりとりルール」は、鑑定士になりきっての「いい仕事していますねえ」です。

【やりとりルール】 ～三人の鑑定士「いい仕事していますねえ」～

依頼人：この は、一体何なのでしょうか・・・。

鑑定士A：この は、 ですよ。

しかし、よくできていますなあ。それは、・・・。

鑑定士B：私は(も) だと思います。

他にも がとてもよくできていますなあ。

鑑定士C：でも、 がおいしいですなあ。それは、・・・。

全 員：いい仕事していますねえー。

鑑賞作品をみて、どのように感じたのかみえたかなどを鑑定士となって即興的に演じていきます。まちがいも認めましょう。思いつきも認めましょう。信じるものは自分の感じ方です。自分の感じ方と友達の感じ方をぶつけ合いながら、やりとりを通して作品に親しみ、作品をじっくりみながらみ方が広がっていくことを感じ・意識させていきたいと願っています。

風神を切り抜いた屏風を黒板の台の上に置きます。そして、「いい仕事していますねえ」という「やりとりルール」で意見交流していくことを告げます。

足の部分 胴体の部分 風袋の部分 顔の部分の順番に提示して、学習を展開しました。

「やりとりルール」で行った授業の様子を次に示します。

風神の風袋の部分のみでのやりとり場面

写真3 . やりとりルールの提示

依頼人： さてさてこれは、屏風の一部だと思うのですが、これが何なのかさっぱり分かりません。鑑定の先生方鑑定をよろしくお願いいたします。



鑑定士A： これは実は、風神の帯なんです。しかし、よくできていますなあ。色々な色が使われていますねえ。

鑑定士B： 私は、風神が持っている袋だと思うんです。しかし、よくできていますなあ。それは、袋が風におどらされているようです。

鑑定士C： 私は、これは風神の帯のようなものだと思います。空から降りるときに使うようなものだと思います。それは、手がここにあるので、こうやって降りているのだと思います。

教師： 鑑定士さんが言ったことを確かめるために、この部分をはめてみることにします。

子ども： 風神が持っているのは、袋を持っていて空をとぶためのもので、今、空から降りようとしているところだと思います。

子ども： 白い物は帯だと思うんだけど、帯の端を持って、天から降りるとき、下から風が吹くので、そのとき帯がはっているところだと思います。

子ども： 袋の先を持って、風に乗って飛んでいるところだと思います。タオルのようなものだと思います。

教師： それを持って何をしているのでしょうか？

子ども： 黒い雲に乗ってすべって降りているところだと思います。足がそんな感じだからです。

子ども： たぶん走りながら縄跳びをしているところだと思います。

教師： 本当に縄跳びをしているところですか？

子ども： 帯のような白いもので縄跳びをしたら跳びにくいと思います。

子ども： ぼくも縄跳びではないと思います。それは、そのタオルのようなものの端っこを持たずに中の方を持っているので跳びにくいと思います。

教師： 縄跳びをするポーズをとってください。そのポーズとこの風神の違うところはありませんか？

子ども： 左手の向きが違います。これでは縄跳びができません。だから、縄跳びではなく、かけっこをしているんだと思います。もう一つの屏風に雷さんみたいな人がいると思うから、この絵を描いた人は、人を笑わかせようとしたんだと思います。

子ども： きっと風神が、雷神のところに行っているんだと思います。

鑑定士B： もしかして、風の神様だから風を起こしていると思います。

教師： みなさんからたくさんの意見が出されて、色々なことが分かってきましたね。それほどおもしろい絵なのですね。

全員： いい仕事していますねえ。

写真3 . やりとり場面



以上「やりとりルール」をもとに風神の風袋について交流していった場面について紹介しました。

子どもたちは、風袋を帯と言い、タオルと言い、それを持って降りようとしているとか縄跳びをしているとか風を起こしているとか、子どもたちの感覚で自由に話し合われていったことが伺えます。

2 時間目

2 時間目 この穴のところに何がかけられているかを考えよう。(雷神編)

1 時間目同様に「やりとりルール」に従って、雷神の足の部分 胴体の部分 腕の部分 顔の部分という手順で、自由な意見交流を行っていきました。子ども達からは、絶えず風神と比較しながらの意見が出され、そこで出された主な意見は次の通りとなりました。

- ・ ふんばっているにしては、足の向きが変わっている。足の向きを真似ようとしてもできない。
- ・ 鉄の棒を持って電気を起こしているようだ。
- ・ 足の裏がみえるので、この絵を描いた人が高いがけからみあげて描いたのではないか。等

3 時間目

3 時間目 風神雷神の屏風を対にして並べてみてみよう

ここでは、風神・雷神を並べて鑑賞します。風神と雷神との関係を結びつけてみていくと、それまでとは違ったみ方が発見できます。

子どもたちの授業後の感想を紹介します。

授業後の感想

風神様がどこを見ているのかはよくわからないけれど、雷神様は、にらんでいる場所がななめ下で、もし水神様がいたら、自然の天気を三人で相談して国を守っているのではないかと思ったよ。昔の人は、テレビがなかったから、これを見て楽しんだのかな。国宝といわれるほどだから、実物はもっと美しいのかな。昔の人は、神様を信じ続けた人たちなのかと思ったよ。

風神と雷神が下を見下ろして地上の人間たちを見守っているようだと考えていますが、その理由は、風神や雷神の視線にあります。風神の視線が雷神の方に向いているのに対して、雷神は、斜め下に視線がいていることに不思議さを感じさせたのでしょう。

また、対にして並べることによってみえてきたことは、雷神の方から風神の方へ風が流れているというみ方の発見です。風の動きを意識して見事に表現していることに子どもたちは驚かされたようです。

当時の人々の視線で

和ろうそくの明かりで照らしてみよう

校内にある茶室の部屋を利用して、子どもたちの対面に教師自作の「風神雷神図屏風」を置くという構図をとりました。

その主な理由として、

当時の人々の視線で「風神雷神図屏風」を鑑賞していきたいということです。

当時の人々の視線とは、

その第一点は、畳の上に座って斜め下からみるということです。

そしてもう一つの点は、和ろうそくの明かりで横から或いは、斜め下から光を当ててみるということです。  
そのために、校内にある茶室の畳の部屋を活用することにしました。

写真4 . 校内にある茶室



授業での子ども達の反応は、

- ・ 金色のバックに風神と雷神が浮かび上がって見える。
- ・ 何か音が聞こえてきそう。風神様からは、ひゅうひゅうーという風の音が、雷神様からは、雷のゴロゴロという音が迫ってくようだった。
- ・ ろうそくの炎がゆらゆらしているために、不気味に見える。

等の感想を寄せてくれました。蒸し暑い梅雨時期に雨戸を閉め切って行いましたが、この授業は、強烈な印象を子どもたちに与えたように思われました。

写真5 . 茶室の畳の部屋



写真6 . ろうそくの  
明かりでみる



今日は、茶室で風神様と雷神様を見て、やはり明るいときは笑って地上を見下ろしているように思うけど、暗くして見たら、風神様も雷神様も目を大きくしてこちらをにらんでいるようにみえました。

しかし、ろうそくを点けるとこちらをにらんでいるだけではなく、ろうそくが炎のようで、地獄の鬼というような感じでした。今にも出てきそうで、目が動きだしそうな風神様と雷神様・・・。

「ゴロゴロゴーロ。ピューピュー。」

まるで、絵に生命が入ったようでした。